ラカン派イデオロギー論の研究
——スラヴォイ・ジジェクの批判的読解——

樫村愛子

Abstract

Slavoj Žižek analyses the ideology by the lacanian theory, specially he uses the concepts in the last periode of Lacan's theory (ex. the real, the enjoyment etc.). But Žižek thinks the enjoyment negatively and doesn't think the mode of the enjoyment which functions in the change of the subject.

本論は，スラヴォイ・ジジェクをとりあげてそのいくつかのテーマを批判的に検討する。

ジジェクは，ラカン後期の現実界（le réel）の理論に特に焦点をあて，象徴界の穴＝現実界の裂け目を巡ってイデオロギー的現実が構成されているというテーゼを中心に政治的イデオロギー分析を行っている。しかしジジェクは象徴界の外側を恐怖の対象としてしか記述せず，主体の生成そのものに関わる現実的領域をあらかじめ忌避し，神経症的・イデオロギー的な議論となっている。ここでは主体にとっての外傷であり享楽である主体の生成の瞬間とその反復を記述していく可能性が奪われてしまう。ジジェクにおいて現実的領域は，それ自体検討されることはなく，そこからもっぱら逃れるためのものとして，特に幻想を中心に検討が行われている。もちろんそこでは精神分析が幻想を解体する力は意識されているが，主体が幻想を脱する可能性および享楽に生きる可能性等は排除されている。それは，ポストモダンの存在を否定し，主体の現在の構造に立場的に執着しようとする姿勢にも表れている。もちろんといって，現在のポスト構造主義と呼ばれる人々が，この幻想から脱しえているわけではないだろう。ドゥルーズにおいては外傷抜きに享楽があるというユートピア的幻想があるが実際には部分欲動しかなく，デリダにおいても決定不能性といった言説体系そのものは強迫神経症的にシニフィカシオンの全体性の内部にしか存在しないだろう。しかし，ジジェクのこうした現実界のとりあげ方そのものが，彼のイデオロギー分析においても，イデオロギー

の形成過程における不透明性として現れている点で欠陥を持っていると思われる。以下，具体的にみていこう。

1．権威と転移について

ジジェク[1)]は，権威と転移の関係を説明するために，キリスト教の例をよく用いる。ジジェクは，キルケゴールを引用しつつ，キリスト教の権威は，その教義の言表内容にあるのではなく，言表行為およびその行為者としてのキリストにあるとする。つまり，もし信仰がその教義の内容において信・不信が決定されるようであれば，それは絶対的な信仰とはいえず[2)]，ゆえに主体にとって絶対的なもの（信仰の対象）は，シニフィカシオンの水準にはなく，それはキリストにおいてキリスト以上のもの（対象 a）を想定する幻想の中にあるとする。しかしここでキリスト教に限らず世界宗教の持っていた教義の言表内容の隠喩の水準の高さを思い返すとき[3)]，信仰の権威が全く言表内容に関わらないとするのは問題があるだろう。

ジジェクは，キリスト教の教義内容そのものはほとんど無意味であるとしている。しかしそこでのトートロジカルな形式こそが，シニフィカシオンの水準ではなく「父の名の隠喩」として機能し，信者の実人生における真理の不在を提示して信者にシニフィアンを与え，この享楽の体験によって，信者を神経症から救うのではないか。ここで起こっていることは精神分析において起こっていることに近いだろう。内容が無意味であれそれは言表内容の水準を抜きには語れないことなのである。ジジェクは分析における分析家の役割を「無言の重き存在」として表象しているが，この形容においては分析家が与える隠喩およびシニフィアンの重要性が認識されていないかのようである。もちろん分析と宗教は同値ではなく，キリスト教においては，この後神の言葉がフェティッシュとなり倒錯へと導くことになるのではあるが。

このようにキリスト教においても分析においても与えられる言葉は，シニフィカシオンの水準にあるものではないが，それは何でもよいわけではなく，享楽を可能にする隠喩でなければならない。主体における享楽は，ジジェクの記述でいけば神秘主義的な偶然性のもとに置かれてしまい，例えば享楽を与える芸術的経験のポジティヴな側面などが捨象されてしまうだろう。もちろんここでは，分析なり享楽が可能になるためにジジェクがいうようにあらかじめ分析なりキリストの権威が社会的に想定されている方が転移を容易にするとはいえるかもしれない。しかしここからラカンやマルクスの権威と教条主義を擁護してシニフィカシオンと幻想を結合させ転移を維持しようとする言明[4)]は，むしろ有害だろう。言説そのものに力があれば，転移は可能なはずである。

2．幻想的現実と享楽について

次に「幻想的現実」についてである。ジジェクは，不可能である現実界および現実的なものが，象徴的な禁止の対象（ユートピア）へと変質することを，主体にとっての普遍的事態として記述しているが，これは神経症の機制である。神経症は現実的なものを排除するが，脱神経症においては，現実を支える幻想に，享楽の動きを再演する現実的なものが関与している。また主体が，ジジェクのいうように，夢で出会った現実界から逃避するため現実へと目覚めるとすれば，現実より夢の方が真実に近い次元にあることになってしまう。しかし実際は，幻想的現実は，対象aにおいてシニフィカシオン（大他者の贈与物）とともに現実的な動きをそこで再演している。主体は，まさに現実界（とシニフィカシオンにまたがった世界）へと覚めるのである。むしろここで夢の中そのものには現実的なものはないのではないだろうかと考えることも可能だろう。主体（厳密にいえば夢において主体はないが）が夢の中で現実界に出会うのは，夢が現実的なものを内包しているからではなく，むしろ夢から覚めるとき，主体の構成において作用している現実的なものが，シニフィカシオンなしで出現してくるからではないだろうか。夢は，隠喩なしでつながっているシニフィアンの連鎖であり，快感原則にもとづいた部分欲動の世界である。ここから主体へと戻るためには，原初的な外傷を反復しなければならないのかもしれない。とすれば，まさに覚めるときにこそ，現実的なものとの出会いが，シニフィカシオンを欠いた状態で起こるのかもしれない。

次に享楽についてである。ジジェクがよく用いる対象aの図は，享楽についての図ではなく，幻想についての図である。確かにこの図において対象aは，快感原則の閉じた回路を中断し，その均衡を奪っており，対象aとは「失われた対象」であるから，消しようのない不快をもたらし，この外傷的不快は，享楽を再現している。が，そもそも幻想という事態そのものが，享楽を，享楽が不可能となってしまったあとから事後的に意味論的に再構成しようとしたものである（まさにジジェクが行っているのはこのことだろう。）このように，遡及的に構成された意味論的形成物（幻想）と享楽は，同じものではない。享楽は，このような閉じた循環運動ではなく，主体がある情報体から別の情報体へシフトし，そこでは主体の書き換えがおこるような運動である。ゆえに享楽の瞬間においては，主体は「消滅する＝ない」ともいえ，「新しく生成される」ともいえるのである。その瞬間起こっていることは認知不能であり，ゆえに事後的に現実的なものとして措定されるのであるが，そこでの主体の書きかえといった，この図の外側での事態は，この幻想の図からは導き出せないのである。享楽は，むしろ幻想と古い主体を解体するのである。

3．イデオロギー

次に，ジジェクのイデオロギー論を分析しよう。

イデオロギーという用語は，ある言説が存在するとき，その言説の存立可能性への遡及的問い[5)]が可能になったとき生まれたものである。イデオロギーの語源であるイデオロジー（観念学）は，19世紀初頭，デステュット・ド・トラシーにおいて，人間の観念を人間の生理や心理から説明しようとする試みとして生まれた。また最初のイデオロギー論としてよく引き合いにだされるベーコンのイドラ論（1620）は，4つのイドラにおいて人間の認識の制約条件を挙げた。総じてここでは，ある言説や観念の真理の保証そのものが問われているが，その根底には，「伝統的世界」から「歴史的世界」への移行とよぶべきものがある。

「伝統的世界」とは，主体をシニフィアンとして成立させる原初的剥奪＝享楽を儀式的（宗教的）再演として反復することで成立し，現実的なものを隠ぺいしていたのだが，その反復の再剥奪，すなわち聖なるものとその暴力の剥奪（科学の出現）といった「歴史的世界」への移行において，現実的なものが露になり，主体への問いが開かれる。こうして自らを絶対視する，ある言説や観念の真理そのものの制約を指摘する行為がイデオロギー批判として現れ，伝統的世界および神学的イデオロギーは批判されることになった。が，一方で主体への問いは，哲学的イデオロギー的回答という形で，再度神経症的に防衛封印されることにもなり，神学的イデオロギーの批判の担い手であった近代ブルジョワジーは，自らの正統性（民主主義・自由平等・近代的主体）について批判されることになる。

近代的イデオロギーの批判は，マルクス・ニーチェ・フロイト・ハイデッガー等によって行われたが，そこで論じられたのは，人間が予料しうるものとしての世界（意識・前意識）の限界性であり，そこではシニフィカシオンとしての世界を超え，この世界を産出する現実的なものがそれぞれのしかたで提示された。そしてそれは，ラカンの分析的言説により完成された。こうして近代的イデオロギーは，世界の外に存在する（現実的な）主体のありよう（言説化しえないもの）を認めず，すべてを言説の枠内に無理やりねじ曲げてしまう神経症的言説として批判されたのである（科学はヒステリー的言説から生まれ主体を排除して成立し，哲学は世界に対する懐疑としての問いから出発するが，前提とされる世界の全能性そのものはヘーゲルにせよカントにせよ維持されて問いは回収される）。

このように歴史的世界の二面性，すなわちイデオロギー批判を可能にして存在への問いを可能にしつつも，それが開いた現実的なものとの出会いを自身が拒否するとき，近代的イデオロギーや，また伝統的世界への現実的退行として全体主義的暴力の近代的形式（ファシズム，スターリニズム等のイデオロギー）を生み出すといった事態が，我々の世界を特徴づけている。と同時に歴史的世界は，分析的言説のように去勢を可能にする言説をも生み出した。真にイデオロギー批判が可能であるとすれば，大他者の幻想を棄却した，すなわち去勢され

た言説によって遂行されるべきであろう。

上述した現実的なものとは，主体が暴力的にシニフィアンとして措定された享楽に由来するものだが，これを可能にした現実的な〈他者＝もの〉（母）は，象徴的世界の完成とともに幻想の領域へ大他者として後退する。この幻想の領域は，原初的剥奪＝享楽という無意識の領域でのできごとを，大他者からの主体（へ）の贈与として，シニフィカシオンの水準へと翻訳する機能を持っているが，これは同時に現実的なものを隠ぺいする（否定する）作用とも理解できる。この後者の局面がイデオロギーであり，そこにおいて主体は，シニフィカシオンの水準のみで存在しようとし，実際には現実界にまたがる無意識の主体の様態は，イデオロギーによって硬直的に否定され，ここに症候が現れることになる。つまりイデオロギーは，無意識にまたがる主体の様態を支えるに足る十全たるものではない。というのも再度確認すれば，幻想とは，大他者を常に幻想させるものだが，同時に対象 a のふるまいにおいて主体がシニフィアンとして外傷的（暴力的）に贈与された享楽の瞬間を半ば現実的に再演し，つまりイデオロギーとは違って，現実界ともその作動形態においてつながっているからである。

ジジェクは，先にも触れたように，現実を「イデオロギー的現実」（ここでの「幻想的現実」）と呼び，現実的なものが現れる夢から逃避するかのように，主体は夢からイデオロギー的現実に覚め，これらの様態が分析的空間において露にされるべきであるといっている。しかし，幻想的現実とそれがイデオロギー的に閉じられてしまう様態を区別しなければ，イデオロギー批判の可能性すら掘り崩してしまうことになる。分析的空間において告発されるのは，幻想的現実（ジジェクのいうイデオロギー的現実）そのものではなく（神経症においては，分析において，まずこの幻想そのものを可能にする操作がなされる），そのシニフィカシオンへの翻訳形態である。夢についていえば，主体は，シニフィカシオンを欠いた世界，すなわちシニフィカシオンへの翻訳機能をもつ対象 a とは結合できない夢から，シニフィカシオンの水準のみで閉じられたイデオロギー的世界へと覚めるのではなく，シニフィカシオンと現実界の両者にまたがった幻想へと覚めるのである。

ジジェクにおいては現実的なものは常に遠ざけられまたは埋められるべき穴としてまさしく「イデオロギー的」に表象されている。しかし人々の生きる（いわゆる象徴的）現実とはイデオロギー的にのみ成立しているのではなく常に幻想的現実であり現実界にまたがっているのであって，そこでは現実的なもの（原初的には主体を創成したところの剥奪的暴力）は半ば享楽の動きの再演として再臨しているのである。

したがって真にイデオロギー的世界のみが生きられるとすればそれは現実界を完全に排除した精神病者の世界であり，別の言葉でいえばカフカ的世界（＝言表だけで成立している世界＝裏側のない，トポロジカルなねじれの次元を欠いた世界）だろう。主体の幻想を具体的に支えるのは対象 a（現実的他者の視線や声など）であり，これは大他者からの贈与物としての意味作用を持って大他者と現実界を結合するものであるが，実際には享楽の瞬間の動き

を再演するものである。

デカルトにおいては,「我思う」というシニフィカシオンの水準の作動が停止しそれらが一挙的無意識的に回帰してきたとき「我あり」という主体の確信が起こるが，これはいわゆる前意識において幻想された私と同値であり意識の主体ではない[6]。ゆえにデカルトにおいて起こっていることは，主体の真実ではあるが，デカルトの事後的言説はイデオロギーなのである。

4．イデオロギーの種別性とポストモダン

前節でイデオロギーの構造について精神分析の枠組みから見てきた。ここからさらにイデオロギーの形態の種別性についてみていくと，それはその意味内容の種別性にあるのではなく，ジジェクも指摘しているように，形式性，すなわち大他者とその贈与物である対象 a および主体の結合の種別性にある。ジュランヴィルは，去勢を免れる様態を精神病・倒錯・神経症の順で，退行—昇華のベクトルの上に配置した[7]が，神経症的な左翼運動が末期化すると倒錯に走るように（党内粛正等），諸形態は相互結合しそれは時代の条件によって規定される。また，キリスト教が救済の世界内性を禁止し，不可能を禁止へと抑圧する神経症的イデオロギーとともに，神に対する殉教行為等々マゾヒスティックな倒錯にも支えられていたように，また近代ブルジョワジーの資本主義的神経症（それは想像的局面における症候である）が神経症的症候の現実的側面である身体のファルス化というてんかん症状をプロテスタンティズムという倒錯的構造に再変換したように，それらは組み合わされて出現する。

歴史的局面に目を向ければ，近代は神経症として構造化されているが，そこで幻想された世界の輝かしい未来（大他者）は今日失墜し，世界における物語（イデオロギー）は消滅した。これが現代のポストモダン的（脱神経症的）状況である。しかし大他者は失墜したとはいえ，もともと大他者とは，他の性 A の倒錯的解釈でしかなかったことに留意すべきである。つまり世界の神経症的（近代的）解釈は，世界の倒錯的（キリスト教的）解釈の上にのみ存立するエピステーメーである。よって対象 a は，大文字の他者の意味論的投射物としてでなく，他の性の器官として存立しえ[8]，それはまさにラカンの思想の不変的根幹たる（鏡）像（というより全体像 a）であり，そのようなものとしてふるまいうる。そしてこのような種類の対象 a が今日の商品であり，ゆえにそこではイデオロギーの媒介はなく，他の性が直接に幻想される。すなわちポストモダンは存在する。経済状態を中心とした安定性のほころびがやってくると，退行的に，ナショナリズムやファシズムといった共同体の回帰の幻想的イデオロギーが復興するが，商品が対象 a として主体の幻想を支えている限りにおいては，イデオロギーそのものは媒介しない状況にあるといえる。

商品はその意味ですべて性的商品である。男性が BMW を乗り回すとき，女性がシャネル

のスーツを着こなすとき，彼らはそれらを大他者からの贈与物として持つのでなく，他の性（へ）の器官（ラカンの用語ではリビドー）として持つのであり，BMW はファルスであり，シャネルのスーツは視線であり[9]，そこで生じるのは他からの主体の贈与でなく，主体が自ら（へ）の皮膜へと立ち上がる，まさに想像的（現実的）鏡像的特化という事態である。いずれにせよ真にポストモダン的状況において，主体は他者の賞賛というイデオロギー的次元を期待するのではなく，まさにそれ自体を性的行為として商品と関係を結ぶであろう[10]。しかし上述の事態は，意味論的水準からほとんど現実界へと対象がずれ込んでおり，真にそれが可能であるとすれば芸術的体験に近い。実際には商品とはむしろ症候であり，大他者が解体しつつある時代の代補として，すなわち神経症の末期的形態として，退行的に意味論的にしか存在しえていないのかもしれない。商品とは，新たな主体の存在様態に対する資本主義的＝神経症的反動形成物であろう。

表象について見ていくと，イデオロギーにまつわる表象は，神経症においては禁じられているものに関わり，倒錯においてはフェティッシュであろう。またイデオロギーを経由しない幻想における表象は上述のとおりである。芸術は，宗教において幻想の表象を提供し続けてきたように，イデオロギーの対象を提供することもある。しかし真の芸術は享楽を与えるものであり，そこでは主体の幻想はうち破られ，主体の書きかえともいえる暴力的な体験がやってくる。享楽の表象とは，父の名のような強い隠喩作用を持ったシニフィアンである。

注

1）Žižek S., 1989, *The Sublime Object of Ideology*, Verso
2）カントの倫理の実践の問題と同値である。
3）「神を試してはならない」「信じる者は救われる」といったパラドクス的表現。
4）ドグマティックである。
5）これは結局，言表から言表行為への問いと同値になる。
6）ラカンにおいて意識の主体はなく，無意識の主体しかない。
7）Juranville A., 1984, *Lacan et la philosophie*, puf
8）ここで人は，器官が他の性の幻想を生成する，当初とは反転した地点に至りうる。
9）しかしそれらは主体および大他者のないファルスと視線である。
10）とはいえ，真にポストモダンなどがあるとすればだが——そこでは主体も抹消されてしまう。